

名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻（八）

野 崎 典 子

『小窓間語』

今回は、「名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻（七）
（『あいち国文』第七号 平成二十五年九月 あいち国文の
会）に続くものである。今号は、前号の続きにあたる『続
学舎叢書』第二冊三十六丁表後半部分より翻刻を試みる。

【翻刻】

『小窓間語』

鈴木忠侯集校

一 神代の巻に風雨ふううといふ字にかせあめと仮名をつけたる
は文字につきての仮名なり風雨とありてもあめかせといふ
読へし我國の語にかせあめとハいはすあめかせといふ
也漢字を借用るにおゐてハあめかせに風雨と連続れんぞく字を

一

用たるなり神代巻に不限和書にハかゝる類多きなり風
波なみもなみかせ山海さんかいもうみやま昼夜ちゅうやもよるひる夫婦もめ
をとなり

万葉集に祈いのの字をたむけとよみ祭礼さいらいもたむけとよめり
七夕の故事牽牛織女娶会の体は異邦の事にして吾国の
故事にあらず日本にてハ初秋棚機姫を祀まつるハ上古より
の事（51オ）なり日本書紀第二に曰ク故歌之曰ク阿妹
奈屢なるや夜乙登多奈婆多をとたなばた廻紆奈我勢屢のうなせ云云 アモナルヤハ天
に在哉也天とハ都なりヲトタナハタハ乙女棚機也天朝
につかふる官女に天棚機姫命ありそれを書る古語拾遺ニ
曰ク令天棚機姫神ヲ織神衣所かんをレ謂和衣也とは衣服を織
給ふ職の神にして歌にたなはたつめと詠る是なり延喜
式神名帳に天ツ多奈波多の神社有山城の国稻荷社伝ニ
曰ク七月七日於三稻荷三箇ノ峯ニ祀天棚機姫命一云吾朝

にて乞巧奠の事ハ天平勝宝の頃より初るよし江次第公
事根源にみえたり

万葉集に

七夕の五百ハタタテ、ヲル布の

〈51ウ〉

秋去り衣タレカトモミン

天の川と歌によめるハ日本書紀所謂天安川にして
今河内国交野郡に流る、天の川是也川辺に七夕神社有
此事員原氏の諸州
巡覽にも見えたり

説也

扇のかなめハ蟹目なり

あこめあふぎ桧あふきのことくなるものハ唐土にハな
しとなり唐土の扇といふハふちハ木にてもあれ金にて
もあれ中ハ羅の類にて張たるもの、よしなり丈山の富
士の詩も唐人の心得さりしと也

富士之詩

〈52オ〉

仙客遊盤ス雲外嶺 神龍栖ミ老洞中ノ淵

雪ハ如ニ純素ノ煙ハ如シ柄ノ 白扇倒ニ懸ル東海ノ天

紀貫之か童名阿古久曾といふ心得かたし阿古ハ上古の
男児なんしの通称にて一人の名にあらず 菅公七歳の時の
御哥とて

うつくしや紅にも似たる梅の花

阿古か貞にもつくべかりけり

職人つくし歌合のこと葉書にも阿古よぶくたもてこと

有久曾ハ麻呂と同じ日本書紀に倉の臣小糞日本後紀に
安倍朝臣男糞三代実録にも卜部乙糞などいふ人有糞丸
といふハ不韋ふきあはせす合尊の故事より出たりと古語拾遺集にみ
へたり

和琴も六の緒ともよめり六帖に

〈52ウ〉

むつの緒のよめりことにそ香は匂ふ

ひく少女子か袖やふれつる

あつま琴ともよめり

夏来れはあつまの琴のあしつをに

よりかけてけり藤なみのはな

源氏花鳥餘情の序にあつまをしろくの器のうえにを
き紫をよるつの色の中に尊ぶとありあつまとはかりも
いふにや

琵琶を哥にこと、よみ或ハ四の緒ともよめり堀川後百首

王照君をよめる哥

道すから馬のうえにてひくことの

をごとに玉をぬく涙かな

〈53オ〉

六帖に

よつの緒におもふ心をしらへつ、

ひきあかせとも知る人もなし

一 鼓の胴の名所



一 烏帽子の前へなびきたるハ平礼うしろへなびきたるハ

梨子打と云也

一 奴袴の色さしぬきの年齢にしたがひて次第にうすくなる八年を経て摺はかしたるといふ意のよしなり

一 単色は喪服の色なり鶴の黒羽色と名目を替て常に用らる、(53ウ) よしなりかすみのころもといふも単色の事也東山院崩御のとき中院前内大臣通茂公の歳暮の哥に

けふといえとことしもやみに暮にけり

かすみのころも春はきぬらし

或の云御国忌ハ十二月十七日也

一 目結といふハ俗にいふ鹿子の事なり四ツ目結ハ四ツ目をあけ繁目結は目を繁くむすびたるものなり

一 襦袢は少児のふすまなり我国式法のむつきハふとむの如くなる物のよしなり襦袢ハむつきぬなりかにとり小紋をつくる也今民間にも少児のうぶきぬにかにとり小紋を付るは此故也かにとり小紋とハ宝盡しの事也(54オ)

一 論語に紫の奪^{あけ}朱也とあり紫と紅は互に色を奪れて

悪見ゆる也此外の色も奪はる、色有男女装束にいろくの衣をかさぬるに色をうはれぬやうに重ぬる事衣紋者の古実也鎧をおとすにも色みの糸をまぜて段がわりにする時も此心得有へし又立花などにも色みの花を多く立る時ハ色を奪れぬ意得有へし又相生相剋の色を弁ふへき事也

或曰相生ハ

青赤 赤黄 黄白 白黒 黒青
相剋ハ

青黄 黄黒 黒赤 赤白 白青

又五行にたとふる時は

木青 火赤 土黄 金白 水黒

(54ウ)

一 纈纈は結の地をくゝりて染る也雌紵雄紵有て纈と纈とハ別なりと延喜縫殿寮式にみへたり女中の裳唐衣などにする事有むかしハよろひひたゝれにもせしにや古き物語りにみへたりまた目結もか^かのこ^こくゝり染にする也され共後世のものにてはれたゝぬ物也高貴の女中ハ褌の服といえ共鹿の子ハもちゐられぬとなり

一 住古ハ神社へ馬を献る是を神馬といふ神馬を献る事力及さる人ハ木にて馬を造りて献る是又及さる者ハ馬を画て奉る此故に絵馬といふ後世ハ馬にあらず種々の物を画て奉る事になりぬ此外詩哥及俳諧の連哥を奉納す

るも可なり遊女男娼の類或ハ大黒と浮女うかれめの首曳をする
躰などを画てかゝる族もあり〔55オ〕かゝる事ハ不敬
の甚しき也撰津国生玉の社の絵馬に八嶋大臣平宗を伊勢
三郎か熊手にかけて海より引あくる図有大臣たる人の
悪名を絵馬に画て懸る事ハ斟酌しんそくすへしかゝる人画す
も事の欠たる事有へからす此外怪力乱神の事を画て神
社にかくる事なかれ又射人金の的うぶすなを射揚て是に矢一
双を添て其生土の神へ奉納する事近世の風俗也祈願の
人願書に上さしの矢をそへて奉納するハ武門の旧例あ
る事也或ハ炮術の人の躰を画てかけ鈎術の族竹刀木刀
を神社へ掛るも有何の故もなく妄あたに社頭にかくるハ其
名を世上へ流布せしめん為なるへし又數學をする人算
術の難問を作りて神社へ掲かくこれを開解する人も又神
社へかくる是等の入ハ〔55ウ〕神を尊敬して奉納する
に非ず其芸術にはこりて社頭を偽いつはりッて筆ッ戦をなす者
也

一 宇津保柱うづほはしらといふハ殿上の前に有御殿の屋根のつまゝ
のゆきあひにて雨水のもるゝ所なき故柱を空うつらにして其
中より雨水落るやうにしたる柱也夫木集に

しのひをつるうつは柱にかくる樋は

もるてふ水の朽やなからむ

一 往古より禁中にハ紙燭燈籠切燈籠結ビ燈籠火なり以上を用ひ
らる庭上ハ庭燈松明等なり今世も禁中ハ都而油火也御

一 内にてハ品ニより蠟燭を用らるゝ事も有となり燭台行
燈挑灯等ハ〔56オ〕近世出来たるものなり
一 丁ハよほると訓ハ下部のものゝ事也使丁仕丁の類也火
丁といふハ一隊をかゝくもの也俗にいふ食をたくもの
也庖厨くりやの下部を包丁といふ其人の魚類に用ゆる刀を包
丁刀といふを俗に庖丁とのみいへり又魚類の料理する
事をもいにしへより庖丁といふ古き物語の書にもみへ
たり

一 彦ハ男子の美称姫ハ女子の美称也日子ひこ日女ひめなり

一 和上ろうじやう藤和御前和殿といふ事ハ其人をうやまひていふ事
也和ハ日本の号也人の貴賤ハ姓氏によることなり往古
ハ異国の人多く日本ニ来り姓を賜りし也されハ上ウ姓イ
の人を日本の氏なりとうやまひて和上藤和殿和主とい
ひしより起りたるなりわしハ私の略といへど和氏なり
おらも和等なりわごれも和御料なり西国にてハ人をさ
して和比郎といえるも和氏郎なるへし〔56ウ〕

一 西国辺にてハ女の名を袈裟千代袈裟亀亀菊乙鶴杯とい
ふ有古き事ハ辺上に残れり

一 笛とハ吹物の惣名なり笙簞ふとうひらき簞尺ハの類ひみな笛なり

一 禁中の笛筥といふに色ミの吹物入る事なりときけり

一 音曲杯を誉るにやうようくといふハ洋ミの字なるへし論

語ニ洋ようミ乎盈とせぞる二耳に哉と有孔子の樂をほめ給ひしこと
はなり

一 桑原といふ所ハむかし菅家のしろしめしたる所也延喜の霽はれ露れその後たひく雷の落たりしに此桑原にハ一度も落す雷の災なかりしとかや是由つて京中の兒女雷の鳴ときは桑原くといひて呪しけるとなり今二至りて斯云事也

一 むかし諸国に便宜ひんぎに随ひ兵器を納め置る是を武庫とも兵庫共（57オ）いえり摂津国武庫といふ是なり兵庫の浦もこの故也

一 殿門に額をかくるハ我国中頃より異国の法にならへるなり神社の鳥居にも額をかくる事になりたり鳥居に額柱といふハ額をかくる柱也後世ハ額をかけぬ鳥居にも額柱をもふけたるやうに成たり伊勢両宮の鳥居に額柱のなきハ新シ義を用ひさるゆへなり

一 恋すてふ衣ほすてふなど、いふ哥の言葉ハ恋すといふ衣ほすといふとの事也といふの字の返しちなれともちとて二四の仮名通じててふといふとなり吉野なる難波なるといふ詞も吉野にある難波にあるといふ事也万葉集に吉野なると有是もにあの反しなり是等を仮名返しといふ

一 物部の八十氏（そやうし）といふハ武士（もゐ）に氏多き事をいふといひ或ハ物部の（57ウ）姓に支別（しべつ）多くて八十姓ありといふ事なりといふ此二説共に非なるへし倭姫命の世記を考るに一役宛事を司る人種類の多きを物部八十氏とみえたり

一 或人云はいるといふハ這入なりされハ客の来る時主人御這入有と云ハ礼の詞也已か家の低くせはくて身を入

れかたけれハ這入給へといふ事なり客の方より這入へしといふハ無礼の詞なるへしとなり按るに論語（二）曰入（二）公門（一）鞠躬如也（二）如（レ）不（レ）容（二）鞠躬ハ曲身也公門高大（二）而如（レ）不（レ）容敬之至也（云）是を以（テ）みれハ門戸広しといへとも

屈敬してせバきか如し這入へしと客の方よりいふも礼の詞なるへし

一 阿保（あほ）と云ハ乳母（うば）の事を云也是をいにしへよりあこと訓するなりホトコト同音通するにや西国辺にて母をあほうといふ所も有是によるへし（58オ）

一 鎌倉將軍家の屋形造に寝殿有母屋（もや）中門廊中門侍遠侍など、いふ所有たると見えたり此等の事も室町家の時より一ツ変（シ）したり書院といふもの古き書物にハ見へす玄関といふも遙に下たりて世に出来たりとなり今の世に玄関といへるハ往昔の中門侍の事にやと思ハる

一 木曾ハ信濃の国にあらず美濃の国也往昔より誤り來るにや三代実録（けんろく）元慶三年九月四日之記に美濃の国なる事明らか也

一 野干ハきつねの事なりといへ共曾我物語をみれハ鹿猪狐狸兎狼すへて獸の惣名をいふやうに見えたり狐狼野干ともいへば惣名を言にや

一 官家の女中ハ八月十五夜に芋を箸に貫き其穴より月を

みて月々に月見る月ハ多けれと月見る月ハこの月の月
〈58ウ〉といふ哥を吟せらるゝとなり

或人云此哥三十一文字の中に八月十五夜といへる
事こもれりとぞ

百千鳥ハ鶯にはあらず都て諸鳥の事也とおもはる古今
集後拾遺集にも鶯の題をはなれて別に入たれハ鶯にて
ハなき事しられたり

俗にいふ食のさひの事をあはせといふなりうつほ物語
清女まくら艸紙にもみえたり

梓弓ハ梓の木にて作り真弓ハ檀の木にて作れる弓なり
されハまゆみの弓といふへきを檀の訓の中にゆみとい
ふ事のあれはかさねてゆみといはす是古訓なりと先達
のいえり

太平記山門攻の段に本間孫四郎か強弓をいはんとて白
木の弓のほこみしかにとみえけれ共尋常の弓に立双へ
たりけれバ〈59オ〉今貳尺あまりほこ長にてありける
とかけりいかに太き弓も常の弓より絢尺あまりも長く
ハ弓のちからもつよかるましくとおもはる

兵ハ字書の刀劔の物名也兵に五ツ有一弓二矢三矛四戈
五戟といふ日本書紀にも兵をカタナと読せたり俗説辯
に劔術を兵法といふハ誤なりと書しハ却而文字を知ら
ざるなり

古き軍物語にはなしろに付合たとあるハ敵味方思ひ

もよらず出会てたがひにひつくりして臆したる事をい
ふにやはなしろハ臆したる事なり臆すれハ鼻白くなる
なり源氏物語におくしがちにはなしろめる人多かりし
とみえたり〈59ウ〉

神武記曰男軍女軍と有ハ正兵奇兵にて追手搦手の事
なるにや

近江国守山今ハもり山といへ共往昔ハもる山といひけ
るにやもる山と読る古哥多し

渡唐の天神の画影の説有信用しかたきもの也是必菅神
にハ不非へし難波津にさくや此花冬こもり今ハはるへ
とさくや此花と詠ぜし百済の王仁の像なるへしと或人
のいへり

宇留嶋とは琉球の事也彼所ハ素盞雄尊の神幸有たる処
にや我國へ通する詞多しとなり少童の名にも太郎兼松
此郎真三郎などといふ名も有といえり

屠児ハゑとりと訓す畜類を屠るものなり鷹の〈60オ〉
餌などをとるにゑとりといふとなりゑとりを誤りてゑ
たといひしより穢多の字を用ゆ事なりぬと或人の云り
禁中にて月水の有女中を手なしといふとなり御調度に
手もふるゝ事ならされハ手有てもなきかことくなれハ
かくいふにや

往昔香といひしハあわせ香にて薫物の事也中古より加
羅をもて遊び薫の賞翫うすくなりたり後世ハ香といえ

ハ伽羅の事にかぎりたるやうに成たり

一 往古ハ宿衛^{しゆくゑい}の官人ハ弓箭を帶太刀に弦袋をつけたり弦袋とハ弓の弦を入れる袋なり革にてつくり革の緒をつくるなり作りやう秘伝有とそ近代ハ軍陣などにつるまきといふ有鞘^{せう}につらぬきて持たりとなり弦巻ハ藤葛にて〈60ウ〉つくる今近江の国水口にて是をつくりてひさく又古き武者絵杯に刀の鞘に○如斯なるもの有弦巻を鞘に貫きたる躰なるへし

一 小野小町^{おののまち}零の哥家集にあり

千早振神もいまさバたちさわぎ

天の川戸のひぐちあけなえ

さりとてハまた天か下の哥はかり世に伝へて此哥をしる人すくなし

一 あやめもしらぬといふ事ハ文目^{あやめ}もしらすといふ事なりよろづの織ものにあやめ^{あやめ}のあるなり其わかちもしらぬとの事なり

一 むかしハ烏帽子のうへに胄^{かぶと}を着したり保元物語に安芸判官基盛は宇治路へむかふにしらあやの狩衣に浅黄色の〈61オ〉よろひに上^{うは}おしたる烏帽子の上に白星のかふとを着てとありむかしハ糸ほしのうへに笠を着たるとなり後世の剛^{きよ}き烏帽子のうへにハ胄や笠ハ着る事ならず又女も笠を着る時ハ髪も取上て市女笠を着たるなり

一 女官も男官も同じく尊卑官位によりて禁色をゆるさ

る、もあり聴^{きこ}かぬも有近比は絵師の書たるものをみるに式子内親王又儀同三司母小野小町^{おののまち}などの画に尊卑わからざるもの多し壬生の忠峯に窠^{くは}に電^{あられ}の表袴などを画事^{ひが}僻事なり

一 上代ハ布を倭文^{わぶん}二^二和^和名^名といひしなり賤者をしづといふも布の衣服を着するゆへなり唐土にて賤きものを布衣といへるも此意なるへし〈61ウ〉

一 或人三十六町を一里とする事ハ鯉鱗ハかしらより尾に至りて三十六有鯉ハ里なれハ是をかたとりて三十六丁を一里とすといえり按するに是かならず正説にあらす附会の説なるへし夫天三十八宿地に三十六禽あり地霊の数を表して三十六丁を一里とするにやまた周易に一三五七九を天の陽数とし二四六八十を地の陰数とす六八地数の最中なれハ地数に用ゆ六尺を一間とし六間を一段とし六十間を一町とし六ミの因数三十六丁を一里とするにや識者にたゝすへし

一 竹刀木刀しなへなとにて目をつきうたれたる時は鳴瀧砥の粉を目にいれてよし又砂糖水にて洗てもよし竹刀にて目を突れ或ハ強き弓の肩入などとする時ハ目玉ぬけ出て〈62オ〉四五寸もさがる事有其時ハ目玉を掌にうけて冷水をそろくとかくれハもとのことくおさまるものなりとそ

一 まことや時鳥の初音を厠にて聞ハ禍あり芋畑にて聞ハ福有是故に時鳥の鳴頃ハ高貴の御厠にハ芋を鉢に植て入置といえり

一 太平記第七に師賢法性寺の前より袈龍こんりゆうの御衣を着して瑤輿ようよに乗替て山門の西塔院へのぼり給ふ又同巻に折節深山おろしはけしく御簾を吹上たるにより龍顔を拝し奉りたれハ主上にてハおはしまさす尹大納言師賢の天子の袈龍を着し玉えるにてそ有けるとみへたり夫袈龍の御衣とハ天子の礼服なり御即位或ハ朝賀等のときに召る、御衣なり此外ハ黄櫨きろう染青色等を公事によつて着御せしめ〈62ウ〉給ふなり尋常にハ御引直衣なりしかるに袈龍の御衣と書たるハ師賢卿 勅命を蒙り給ひ天子の御真似して山門へ登り玉ひしゆへに天子といはんか為の文勢なるへしか、る時に袈龍の御衣を召るへき謂れなしされハ師賢卿袈龍の御衣を着し玉ひしにてはなし定て直衣なんとにてこそありつらめ

一 往昔ハ鎧を着る時も装束烏帽子を着せしなり礼儀の正しき事おして知るへし

一 下賤の人詞多きをさえづるといふ紫式部日記にあやしき賤の男のさえつりとあり源氏物語にもあまのさえつりと有なり

一 膳といふハ料理調菜のそなはりたる惣名也今俗にいふ膳と〈63オ〉いふは折敷の事なり

一 曾我兄弟ハ富士郡の内杉田村盤若山安養寺末福泉寺にて弔ふ兩人の石塔墓印の松卒都婆の柳なと老木にて今に存す八幡に崇め厚原邑路傍に両社有といふ鷹岳山福泉寺開基雪峯大和尚善喜三年六月十九日化といふハ誤りなるへし按するに善喜ハ偽年号也是浮屠か忘作なり

高崇院峯巖良雪大禪定門 十郎祐成

鷹岳院士山良富大居士 五郎時致

一 南極北極北極ハ天地をつらぬきて不レ動の両点なりたとへバ車の轂こくのことく磨うすの臍へしのことし周天是によりて環くわん転の〈63ウ〉枢たる物なり北辰と云は星にあらず形ちもなけれハ目にもみへすその極にちかき星を仮に名付て北極星といふなり此北極星ハうこかさるにあらす正極を去る事二度半にして衆星と同じく十二時に一周する也譬ハ北極地を出る事三十六度の国なれば極星ハ三十二度半或ハ三十八度半に見ゆる時ありこの五度の差を折ツ半して二度半を増減して北極出地三十六度と定るなり

一 蝙蝠かたはり或ハ扇子を隨身するには常に手に持也懷中の時ハ柄の方を懷中へさしいる、也右の方のこしにさす時ハ笛指といふ後のちにさすを矢筈指といふ左の腰にさすハなき事也と或人いへり

一 檀紙ハ陸奥紙と云又まゆすみの紙ともいふなり〈64オ〉末摘花ハ紅花の事也紅の花ハすへに咲なれハ頓て末を

摘ゆへに斯いふなりとぞ

一 軍中にて冑首をとりたるをもぎつけといふ菓子などを
枝折にしたる意也といえり

一 異国を大唐大明中華など、いふ人多しこれらハひとへ
ニ我國をもろこしの管国にしたる詞なり

一 三浦介といふハ相模国三浦の住人にて其国の介に任し
たる也其頃迄ハ武士に高官なく在国の介に任したるハ
規模きばの事も依て時の人は称美して三浦介といひしな
りこれ他人よりいふ事にて自分ニ相模介といふへし自
身に三浦介といへば自号に成也千葉介狩野介等類ひも
是に同じ鎌倉殿將軍に補せられし時院宣（64ウ）を三
浦義澄よしみずこれをうけ取ときに三浦荒次郎義澄と名乗たる
ハ謙退けんたいの詞也平家物語に右兵衛佐のすけの字にやおそ
れけん三浦介と八名乗らすして三浦荒次郎義澄と名乗
たりと有ハ例の物語の一躰ひとくまなるへし

一 千葉氏月に星の紋ハ俗にいふ十曜にて伊東 相原 原
氏等の用る処なり 如斯作りたるハ非なり古今紋
絵をみるへし又伊東系図に大和守祐時より千葉介常胤
へ月に星の紋を寵望むねぞかしせしかは則譲与へたる時常胤か状に

任懇望之旨幕紋令進候殊更頼朝御口入

之上不及醖酌令進覽候月星九曜五

幅に御心懸可為肝要候尚又使者

用口上候 恐、謹言

（65才）

建久四年六月九日 平常胤

伊東三郎殿

御宿所

一 御菌固の餅ハ近江国火切りの里より貢するを用らる、
なり

あふみのやか、みの山をたてたれば

かねてそみゆる君かちとせは

古今集黒主の哥なり菌固のとき此哥を吟するとなり鏡
餅といふも是故なり

一 瀧口に候する侍を瀧口といふ競瀧口などをいふ是なり
院中に候するを上下北面といひ東宮に候するを帶刀と
いふ帶刀先生せむしとは帶刀の（65ウ）長なり

一 今俗に鶏を呼にと、といふいにしえハ都みやこといひけるに
や万葉集に都みやこと詞を義訓して喚よび鶏とかけり都みやことミハ
五音通する也上古ハ都而諸鳥をよぶに都みやこ、といひけるに
や古事記に哥の詞に都みやことあるは千鳥を呼声なり

一 銚子にて酌をとる事ハ後代の事也今も公事のときハ瓶
子也

一 武蔵の七党とハ私市しひ 丹児玉 金子 村山 海老名 須
貝をいへり又坂東の八平氏とハ 平山 稻毛 長井 榛沢はしか

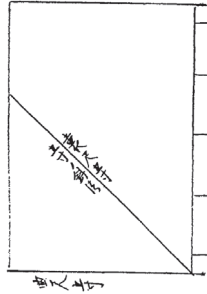
榛谷 都筑 足立 豊嶋なり

一 紀伊国熊野八庄司といふハ玉置 湯浅 秋津 芋瀬 真
砂 山本日の出 湯川をいえり（66才）

一 俗に鐘木杖といふハ鹿杖かぜきの事也山のかせきといふも是也
鏡鐘鍋釜の類ハ鑄るといひ刀劍の類ハ鑄といはす

うつといふとのみ覺へたる人も有いにしへより劍を鑄
るといふなり其証ハ侍中じちゆう郡しちゆう要しちゆう鑄しちゆう節しちゆう刀しちゆう使しちゆう雲井しちゆうの春に
劍しちゆうや鑄しちゆうたてまつりしと仰ありけるとみえたり又職原
抄しちゆうに鑄しちゆう改しちゆう鐘しちゆう劍しちゆう一と有異国の例ハ左傳しちゆう二曰しちゆう莒しちゆう子庚興虐而
好しちゆう劍しちゆう苟しちゆう鑄しちゆう劍しちゆう必しちゆう試しちゆう於しちゆう人しちゆう唐書しちゆう二曰しちゆう鑄しちゆう三尺劍しちゆう三示しちゆう威
光しちゆう一又杜常しちゆうか詩に木梅磨しちゆう玉しちゆう白しちゆう水仙鑄しちゆう劍しちゆう青斯和漢
ともに劍を鑄るといふなり

一 書籍の寸法ハ横曲尺にて六寸ならハ縦ハ曲尺の裏の尺
にて六寸二すへし縦横ともにうらおもて尺にて同寸に
〈66ウ〉すへし外題ハ縦ハ書物の三分二横ハ六分一な
り書物に不限縦横ある箱杯も裏表の尺にて同寸にすれ
ハ恰好よし



方五寸の斜法ハ裏尺五寸なり則書物のたてなり
或曰刀脇差ノ尺ハ人ノ好ミニ因ル事ナル共是

一 表裏ノ尺ニテ同寸ニスレハ恰好ヨシトイヘリ〈67オ〉
慶賀に杖を奉る事高き賤き其隔あらすとなん白銀にて

竹葉なんぞ制するも侍れと其もとハ白竹三尺を古実と
す四十八四寸五十八五寸と年の数にしたかひて長短あ
り百歳ハ四尺也是を奉りて僧せん躰ゆの沙汰さたもあらす近比林
丘寺九十の賀に 上皇より杖をまいらせたまふ

老の坂こえのこすなよも、とせの
春も手にくる杖にまかせて

一 狭衣むらしくれの巻に無量光院の花の下御遊のとき花
を結んで台に戴られたる保安の例とそいふめるとあり
按するに結び机といふ事太神宮儀式帳しちゆうニみえたり松葉
をもつてかさり作るよしなり紅次第に結しちゆう黒木しちゆう一〈67
ウ〉為机なといふ直会食膳まきの机とそ又柳宮も此類にて
いにしへ質素の器なり

一 麻と木綿きんハ神事に用ゆるもの也上古より木綿といふ
ハ楮もろの皮なり紙にすくものなり楮もろと麻とは通用する也
是故に神宮にてゆふたすきハ麻にてするなりゆふとハ
近代のもめんの事に心得てもめんのかなにて木綿きんたす
きをするハ誤り也近代のもめんハ延暦年中しちゆう崑崙人こんろん実を
持来りて三河国に初て植其後絶て久しく文祿年中しちゆう蛮国
より種来りて是より天下にはびこりたりといえり

装束きようそくの袖にひだをとるを搔かと云なり物語の書に袖搔合
と有ハ是也〈68オ〉

一 内舍人ハ人数多くてまきる、ゆへに各其姓をつけて源
内藤内平内善内伴内といふ也天野藤内ハ藤原氏の内舍

人なり紀内行景は紀氏内舎人也伊賀平内左衛門ハ平氏にて内舎人と左衛門尉を兼帯したる人なり今世源内平内など、呼名つくは僻か事なり

一年始の門松は官家にはなき事也古書に賤か門松と見えたれハ往古よりいやしき民の風俗なるへし

一 人の家居に門を四ツあけぬものなり四ツあけすして叶はぬ事あらハ一方ハかならず常には塞ぎて置へししかれ共撰家にハ四ツを吉事とし給ふとなり其故ハ藤原の四ツ門よつもんとて南家北家式家京家とわかれて栄へ給ふ故に吉事となし給ふなり(68ウ)

一 牙の四ツある犬ハ叢くさむらに居る鳥をよく臭知る物なりと古書ニ見えたり

一 後醍醐天皇名和長年なわながとに賜ふ勅書扶桑拾遺集に出たり其文にいわく

漫漫たる海上にいつくともなく漂ひて四かはかりハ過ぬ二十七日の夕かたにや杵築の浦にて西風はけしくふきていかなるべきにと心さわきせしかとも風にまかせしに夜より海山もしつかにて明ぬれハ爰かしこも見ゆるにはふきの湊につきぬ楫取とも今ハ力つきぬと云をとかくして大坂といふ処につきぬ爰ハあら磯にて釣舟たにも稀なりこのところの主といふものも都に在けれハよしあしにつけて問ふへきものもなし(69オ)ともなる人ひとり

一

ふたり猶人もとにとて出ぬ楫取もにけうせぬれハあやしき苦の下に誰ひとりうつもれるたる心の中いはんかたなしなをしなんと引つくりろひて今ハ限りと待居たるに舟のもとに人ひとり来りあらしくもなきはいかばかりそやとあやしき忠顕たけあきそたつねて御迎ひのよしをそうすうれしなんどはか、るためしをそいふへかんめる中く其時ハ心も詞も及ふへきにあらすおもひは出る度毎に其気味なをむねにあり忠をいたすともからいつれも疎なるへきにあらねともさしあたりて待出たりしこ、ちなんにたとうべき(69ウ)かたもなかりし

忘れめやよるへもなみのあら磯を

御舟みふねのうへにとめしこ、ろを

南朝記
新葉集

ながとしか忠功後代の人にもしらせんかためにするしをくなりすゑくくの君にもこれを見せ奉らハいか、おろかならん私の子孫までも此忠ハ朽じとおもへは正直をもつて報国として行末久しくつかへたてまつるへし

新葉集三云この歌ハ元弘三年ごまの隱岐国より忍ひて出させ給ひける時源長年御迎に参りて舟上山といふ所へ入奉りけるほどの忠烈なりし事など記し置せましけるものの奥に書そへさせ玉ひけるとぞ

西行か撰集抄もとは三卷なり九卷目あるは後人増補せ

る物也

一 吾邦に茶を用る事先輩多く説有本朝食鑑大和本草（70オ）等見るへし曰いにしへは挽茶のみにて煎茶ハ近世の事といふは本拠なき説なり余一日類聚国史をよむに第三十一巻王部曰弘仁六年四月癸亥幸^{ふるき}近江国滋賀韓崎^{すなはち}便遇^{すまひあひま}崇福寺大僧都永忠手自煎茶奉御と見えたり然れハせんし茶も上古よりあり

一 記録の書とは大納言を大^言内。中將を中^言。應永を応永。元和を元^言。嵯峨を山^言。醍醐を西^言と書をいふなり釈家にては讀誦を^言。環珞を王^言。菩薩を莽と書類をいふなり

【解説】

『小窓間語』（小窓閑語）の版本と写本と

『小窓間語』の版本は、小窓閑語序、四卷百四十五条の目録、鈴木忠侯識の例言を持ち、その序には「寛政庚戌季冬」とあることから寛政二年（一七九〇）刊とされる。これは内閣文庫新蔵のものも国文学研究資料館のものも全く同じである。写本は『小窓閑語』或は『小窓間語』と記し、可能な限り比較検討を試みた結果、所収記事の有無を表に示した。A欄の版本には記事（記載する事柄）を一か

ら百四十五までの漢数字で条数として通して示しているの
で、その漢数字を表においてもそのまま付した。B欄C欄
D欄は写本である。Bの静嘉堂文庫本のみ序と例言を記す
が、他の写本は序、目録、例言などは記さず直に記事を記
す。Cの大阪市大森文庫本のみ「寛政五年癸丑夏五月中
旬伏屋弘綱写之」の奥書を持つ。寛政五年（一七九三）と
いえば寛政二年の版本刊行後三年である。問題は書写時を
記さないB欄の写本である。もしかしたら写本のうちのど
れかが版本の元になっているのではないかの疑いはぬぐえ
ない。

静嘉堂文庫本も刈谷図書館本も一四五条に渉る記事は版
本に同じで図版なども同じ様である。同じ刈谷図書館にあ
る村上文庫本は百廿五条を欠き、百廿七条には書籍の寸法
図も欠くし、百八条を欠く東大本は版本の元になり得ない
が、記事が揃っている二本については用心せねばならない。
その一つ刈谷図書館本は、半丁に十行の行数また一行の字
数も版本とほぼ同じである。記事は忠実に書写しようとい
う意図はあるが、巻立てもなく、記事の初めから四十四条
までは条数を後に挿入する積りであったものか書き入れる
スペースはとりながら入れずじまいで四十五条からは○印
のみ付すといういかにも不完全な書写の様相を示してい
る。

残る静嘉堂文庫本であるが、序と例言を記し、漢数字で

[illegible]

条数も示す。版本の手本となり得る可能性が最も大きいと思われるが、次に挙げる例により、それは無理であることがわかる。

京中の児女（三十一条）〈57才〉 版本・刈谷本・村上

文庫本・森文庫本・蓬左本・新潟大本

市中の児女

静嘉堂本・東大本

この一字のみならば、誤写と考えられなくてもいいが、次の例は決定的である。

東三条殿入道し玉ひ其御子御堂殿も入道し玉ひたるゆへ(四十二条) 版本・刈谷本・村上文庫本・東大本

東三条殿入道し玉ひたるゆへ
静嘉堂本

これは明らかな目移りによる脱落の結果である。この静嘉堂本を版本の手本にはなし難い。現存する『小窓間語』の写本は版本『小窓間語』に先行することはないという結論である。

ところで今回翻刻した小寺玉晁書写の『小窓間語』（続学舎叢書卷二）は表中のC欄に位置する。大阪市大森文

詩哥連哥及俳諧の連哥を↓詩哥及俳諧の連哥を(55オ)

これは「哥」から「哥」への目移りによる落しと思われ、

電あられの紋もんの表袴↓電の表袴(61ウ)

二十八宿あり地に↓二十八宿地に(62オ)

されハ実じつに↓されハ(63オ)

伊東相馬↓伊東相原(65オ)

古今紋伝↓古今紋絵(65オ)

事こと問とふ↓問とふ(69オ)

あやしきに忠たう頭あきをたづねて

↓あやしき忠頭たうあきそたづねて(69ウ)

のような単純な誤写と思われるものもあり、「あやめ」に付した「もやうのあやめにあらず」(61オ)の説明も森文庫のものと同様の書き方で記している。意識としては忠実を旨としたようで、小寺玉晁自身の筆写記事の選択はなかったと思われる。

そして次の例は諸本間の書写の様子を最もよく示している。

和上臈らう和殿和主とい、しなり・・・起りたる事也・・

……(廿六条) 版本

和上臈和殿和主とい、しなり・・・起りたる事なり・

……(傍書は後書) 静嘉堂文庫本

和上臈和殿和主とい、しなり・・・起りたる事也・・

……刈谷図書館本

和上臈和殿和主とい、し也・是より起りたり・・・又

……村上文庫本

和上臈和殿和主とい、しより・・・起りたる事也・・

……東大本

和上臈和殿和主とい、しよりなり・・・起りたる事也・・

……森文庫本

和上臈和殿和主といひしより・・・起りたる・なり・

……(56ウ) 蓬左文庫本

版本の通り書写したものが刈谷図書館本、版本に倣って写したが、文章の通りが悪いので、後に「い、しより」ではないかと「な」の横に「よ」を傍書したものが静嘉堂文庫本、村上文庫本は割合自由に自らの解釈をして記している。東大本は静嘉堂文庫の良い方採っている。森文庫本は版本から選択した記事を正確に書き写したが、版本の明らかな誤りと判断して「な」を消して「よ」とした。そして蓬左文庫本は森文庫本の良しとしたものを当然採ったということであろう。

以上が『小窓問語』の披見可能な現存本から導き出した版本と写本の関係である。

(のびきのりこ)